

Special Interview

令和初の全国学会！第105回日本消化器病学会総会に向けて

日本の学会のあり方を問う！
新しい「創生」こそが、私たちの使命。



Kaneko Shuichi

第105回日本消化器病学会総会 会長

金子 周一

金沢大学医薬保健研究域医学系 教授

「第105回日本消化器病学会」が、石川県金沢市の県立音楽堂をメイン会場に5月9日から3日間の日程で開かれる。令和初の全国学会とあつて、国内外から数多くの人が出が予想される。今学会で一番の注目ポイントは何か？
思いやテーマ、見どころを含めて会長である金子周一・金沢大学教授に聞いた。

新しいものを生み出す努力が必要

——学会のテーマ「消化器病学の使命」医療の創生、そして世界へ——について
お聞かせください。

金子 ◆ 今から15年ほど前ですが、私が教授になって間もない頃、中東の国ヨルダンの首都アンマンにある病院を訪れたことがあります。街は乾いた砂でうつすらと煙り、丘の上には小さな家がひしめき合っていました。そしてコーランの響き。車窓から見える市民の生活は貧しい印象でした。ところが、訪れた病院は立派で冠動脈3DCTなど最新鋭の機器を揃え、医師は欧米で最新の技術を学んだ人が揃っている。患者さんもまたお金持

ちで、一流の診療を受けている。市民の生活と、恵まれた医療とのギャップに衝撃を受けました。その時に、最新の医療を学ぶのは重要だけれど新しい医療や医学を創ることに貢献していかないと、いずれ日本もこういう時代が来るのではなにか。そんな思いを強くしたことを覚えています。日々の診療に役立つ情報を得たり交換するために学会は極めて重要な場ですが、本来の使命は何かを考えた時、新しい診断法や治療法を創生していくことこそ学会の使命であり、役割ではないか。それを改めて感じていただく場にできないかと思ったわけです。

——学会のあり方に対する自身の問題意識として以前からお感じになっていたのですか？

金子 ◆ 感じていました。今の日本の学会は、ある意味で最先端の診断法や治療法を覚える場所になっています。学会の指針、ガイドライン、シンポジウムなどに行くと最先端の診断法や治療法が効率よく学べます。それはとても重要であることを、私自身よく分かっています。一方で基礎研究を発表する場もたくさんあります。でもそういうところは、どちらといえば人影がまばらです。会場に来るとどうしても今日の診断法、明日の治療法に

遅れないようにみなさんの足が向く。でも消化器病学会のような臨床の学会でも、本来新しい診断法や治療法を創り出すことが求められているはず。新しいものを創り出す勢いが、ここ何年か落ちてきているように感じます。その重要性に気づいて私たち臨床医が新しいものを生み出す努力をしていかないと、日本の医療はどんどん遅れて貧しくなっていく。そうした動きに歯止めをかける意味でも、学会のあり方を改めて問う必要があるのではないか。メインテーマにはそうした意味を込めています。

世界で活躍する日本人

——特別講演では教授がおつしやる新しい創生にふさわしい人を招待されたようですね？

金子◆ 特別講演の一人は、久能祐子さん。この人は京都大学出身の工学博士。アメリカの雑誌Forbes誌が「アメリカで自力で成功を収めた女性50人」の中で唯一選んだ日本人女性です。点眼液の開発、商品化に成功し、その後アメリカに渡り製薬会社を共同創業、薬の開発などで大成功を収めた人です。資産数千億ともいわれアメリカでの地位、評価はもちろん、国際的にも著名な女性です。今は精神疾患薬の開発や、アメリカで大学設立のために動いていると聞いています。久能さんはかねてから「日本人が世界でもっと頑張らないと、このままでは日本がダメになってしまう」と危機感を持っておられます。私と共通するところも多く「インベンションとイノベーション」のテーマで講演いただきます。

——日本人女性がこれから世界に出ていくには大いに刺激になるお話ですね。

金子◆ そう思います。久能さんは世界で活躍する日本人女性の代表格。きつと貴重なお話が聞けると思います。もう一人、中谷比呂樹さんも国際的に著名な日本人です。2007年から2015年までWHO（世界保健機構）のナンバー2として、感染症対策を牽引されました。中谷さんは、SDGs（持続可能な開発目標：Sustainable Development Goal）についてお話しされると思います。2015年に国連で採択された気候変動やエネルギー、健康や雇用、難民問題など深刻化している課題にすべての国が取り組むものです。政府や産業界、市民社会などすべての人の共通目標で、17の持続可能な開発目標や具体的なターゲットが盛り込まれています。その一つ



に国際保健部門があり、持続可能な世界に向けて国と国際社会が協力して取り組むことを謳っています。日本の企業でもSDGsの取り組みが始まっています。

——特別講演は「市民公開講座」として一般の人にも開放されるようですね。

金子◆ そうです。もう一人、マネックスグループのCEOである松本大さんを含めた3人の特別講演については「市民公開講座」になっていますので、一般の人も聞けます。松本さんはソロモン・ブラザーズ・アジア証券、ゴールドマン・サックス証券を経てマネックス証券会社を設立され、その後上場された人。今や日本を代表する経営者の一人で非常にスマートな紳士。日本人がよくなる仕事術とか、日本のことを大切に思っていて、世界における日本の経済と金融における新技術について講演いただきます。



日本に豊かさをもたらす

——招請講演についてはどんなところが見どころでしょうか？

金子◆ 熊田博光先生は肝臓の薬を開発した人です。熊田先生は医師主導型の開発で製薬企業を成功に導いた人で、開発の一端を話していただきます。二人目は、昨年ノーベル賞の医学生理学賞に輝いた本庶佑先生のもとで准教授になった新藏礼子さん。現在は東大の教授です。基礎の先生で、腸内細菌の制御について講演していただきます。あと一人は、内視鏡で世界シェアNo.1のオリンパスから後野和弘さんに来ていただきます。



——地方で開かれる学会ですが、超一流どころが揃った印象ですね？

金子◆ 特に、特別講演は地方の学会ではなかなか呼べない人たちです。講演者には私のメッセージはお伝えしてあります。日本が豊かでいられる理由の一つは、トヨタやソニーに代表される企業が海外で活躍して一生懸命頑張って日本の富を創ってきた。それはある意味、工学や文系の優秀な人たちが、技術を磨いて世界に通用するものを創りだしてきたから

です。しかし今は、会社がものを創るのが難しくなっています。工学や理学や文系を目指すべきだった優秀な人たちが、ほとんど医学部に流れている。医学部は優秀な人が集まるからいいのかもしれませんが、良い化学材料を創る仕事に従事していたら、世界が驚く製品が生まれていたかもしれません。この人たちがもし良い機械を創る、良い化学材料を創る仕事に従事していたら、世界が驚く製品が生まれていたかもしれません。私たちは今、外国で創った診断薬や医薬品を使っています。日本のものもありますが、多くは外国産です。今日の診断法や治療法を学んで、外国製の診断機器や治療薬を一生懸命使っている。新しいものを創り出す使命感が失われつつあります。その危機意識を共有していただき、新しい創生について考える機会になればと思っています。

Special Interview



金子 周一（かねこ・しゅういち）
金沢大学医薬保健研究域医学系 教授
世界保健機構（WHO）コラボレーティングセンター長

Profile

〔略歴〕 1982年 金沢大学医学部医学科
1987年 米国国立衛生研究所客員研究員
1993年 米国南カリフォルニア大学客員教授
2004年 金沢大学教授
専門分野は消化器疾患一般・肝臓病
2006年 医学部長（類長）
2014年 医薬保健総合研究科長・医学系長
2016年 医薬保健学域長・研究域長
2017年 世界保健機構（WHO）コラボレーティングセンター長

公募演題数は過去5年間で最も多い

——今学会開催にあたっての事前の期待、反響などがありますか？

金子◆実は、今学会の公募演題数は1298題と過去5年間で一番多いんです。昨年、一昨年と東京で開かれたのですが、それよりも公募演題数が多い。それだけ金沢に対する期待が高いと思っています。開催時期は5月の連休明けで時季的にも非常によく、新元号に変わって最初の全国規模の学会です。大いに注目される大会になると、私も楽しみにしています。



写真提供：金沢市

——東京など大都市での学会と比べても決して見劣りはしないと？

金子◆そう思います。実はもう一つ、今までにない試みをしています。学会にあわせてかなりしっかりと本を3冊発行して、事前に参加者の皆様に配布する予定です。なぜそんなことをするか？学会に参加しても多くの演題がありすぎて、自分の興味があるテーマですら全部を把握するのは大変です。発表演題の背景や研究方法を知り、結果を考察することが必要とわかっていてもなかなかできません。一方で、増加し氾濫する医療情報にどう対処するかも問題です。教科書やガイドラインにはタイムリーにまとめられていても、研究の背景や手法、結果の解釈がわからないと臨床の現場で色々な問題を引き起こすこともあります。そうしたことを防ぐ意味でも、学会にあわせて研究テーマや背景、研究の手法でどんな結果が出たかを紹介する本は極めて重要です。研究業績を本にまとめるのは自身のライフワークでもあります。今回

は「肝臓シリーズ」で、消化器病学の領域を網羅することはできませんでした。しかし、肝臓学に関しては学会の会長をさせていただき、私自身がどのように考えて、教職員とともに長い年月にわたって研究を進めてきたかをお示しする立派な業績集ができたと思っています。

——これからの若い人たちにに向けてメッセージをお願いします。

金子◆臨床の医師にとって目の前の患者さんを救うのは大切な使命です。学会に来てしっかりと学ぶことが第一です。しかし、目の前の事実を鵜呑みにするのはではなく、物事の背景を考えて臨床をすること、立ち止まって考えて診療する癖をつけることが重要です。氾濫する情報から全てを覚えるのは、ますます難しくなるでしょう。その時に有難いのは学会の評価であり、これからはAIかもしれません。AIが診断方法を提示して、医師が承認する時代がそこまできています。そのときに提案されるままに医師がサインするのでは



Special Interview

第105回 日本消化器病学会総会に向けて 会長に聞く

なく、ふと立ち止まって、AIがどんな情報を採用しているかを考える。研究をした人は必ず、どういう背景があつて、どういう手段や方法を使って結果が出るかを知っています。そういう人はたとえAIが出す情報でも簡単には乗りません。これからの人たちにはぜひ、そういう目を養っていただきたい。同時に、AIが採用するような診断法とか治療法を創生していつて欲しい。そのためには研究の重要性を知っていただくことを願っています。

第105回 The 105th General Meeting of the Japanese Society of Gastroenterology 日本消化器病学会総会

会長 金子 周一 金沢大学

会場 石川県立音楽堂ほか

会期 2019年
5月9日(木)・10日(金)・11日(土)

消化器病学の使命 ～医療の創生、そして世界へ～



©石川県観光連盟 写真提供：金沢市

http://www.med-gakkai.org/jsge2019/
総会事務局：金沢大学大学院 システム生物学分野／金沢大学附属病院 消化器内科
〒920-8641 石川県金沢市宝町13-1
TEL: 076-265-2233 FAX: 076-234-4250
運営事務局：株式会社メッド 〒530-0012 大阪市北区芝田2-5-14
TEL: 06-4802-6661 FAX: 06-4802-6662
E-mail: jsge2019@med-gakkai.org

KANAZAWA